

文化的景観の領域と類型に関する研究：長崎県対馬 におけるコヤと集落の分布をもとに

小林, 秀輝

<https://hdl.handle.net/2324/2236240>

出版情報：Kyushu University, 2018, 博士（芸術工学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

氏名	小林 秀輝		
論文名	文化的景観の領域と類型に関する研究 -長崎県対馬におけるコヤと集落の分布をもとに-		
論文調査委員	主査	九州大学	准教授 藤田 直子
	副査	九州大学	教授 包清 博之
	副査	九州大学	准教授 朝廣 和夫

論文審査の結果の要旨

本学位申請論文の主題である文化的景観は、日本の文化財保護制度下における文化財カテゴリーの一つである。地方自治体の申出に基づき重要文化的景観に選定された物件は全国で数十件選定されている。保護対象が景観であることから、対象の凍結保存ではなく変化を許容する進化的保全を標榜している点で他の文化財とは一線を画している。重要文化的景観においては、重要な構成要素が指定されるが、各事例の文化的景観の本質的価値に応じて多様な指定のあり方がみられる。構成要素の指定は文化的景観の領域をどのように設定するかという問題と密接な関係があるが、構成要素の指定と保護の領域との関係に関する議論はこれまでみられなかった。

一方、長崎県対馬における倉庫建築(以下コヤと称する)は、気候風土や生業と密接な関係を有しており、当該地域の農村景観を構成する景観構成要素である。コヤは、主屋・馬小屋等・農地・山林と共に一つのユニットを形成することで、特徴ある集落景観を形作っている。このコヤとそれが形作る集落景観は対馬全島にくまなく分布しているが、既存の制度の下では広域的に分散分布する文化的景観を一体として価値付けする方向性は明確に示されておらず、指定の前例もみられない。

以上の経緯から、学位申請論文では対馬のコヤを事例に、文化的景観の領域と構成要素の関係を捉え、コヤの分布の詳細な調査研究に基づき対馬の文化的景観の価値を明らかにすること、そして文化的景観における領域と構成要素の反復的分散分布という新たな概念の提示を目的とした。

本論文は以下の8章で構成された。

第1章「研究の背景と目的」では、日本の文化財保護制度における文化的景観概念の問題点を指摘し、構成要素への着目から文化的景観の領域設定を考えるという本研究の目的を示した。また、研究対象地である対馬の概要と本論文の構成を示した。

第2章「文化的景観の構成要素と分布領域」では、これまでの重要文化的景観選定物件を、構成要素の種類や分布様態、領域設定といった観点から分析し、各事例の中で構成要素がどのように捉えられているのかを整理した。特にこれまで自治体の広域連携事例と捉えられてきた「四万十川流域の文化的景観」や「阿蘇の文化的景観」といった広域の文化的景観と呼ばれる事例を、構成要素の分析という観点から捉え直している。

第3章「対馬の集落とコヤ」では、以降の章のコヤの詳細検討の理解の前提として、対馬の集落とコヤの概要を提示している。集落については、地勢と生業の二点からその成立と分布を明らかにした。コヤについては、対馬の集落に共通してみられる屋敷空間の中でのコヤの特異性と全島におけるコヤ分布の広範性を示した。

第4章「石屋根」では、コヤの屋根材に着目した。対馬にみられる石屋根の分布実態に関する調査結果を明らかにした後、コヤのみに屋根材として石材の使用がみられることに着目し、分布と成立の要因を対馬の気候風土や生業の観点から検討した。

第5章「群倉」では、コヤの立地形態に着目した。まず、群倉の定義に関するこれまでの問題点を指摘した。その後、対馬にみられる群倉の分布実態に関する調査結果を明らかにした上で、寄り辺要素から調査結果を分析した。最後に、群倉の形成が対馬の集落の自然環境や土地利用といった条件に影響を受けていることを示した。

第6章「コヤの所有」では、コヤの所有形態に着目した。対馬の7集落を対象に実施したコヤの所有調査結果を明らかにした後、集落によってコヤの所有棟数や所有する場所に違いがあることを示した。さらに、コヤの所有形態と群倉というコヤの立地形態が密接に関係していることも明らかにした。

第7章「対馬の文化的景観」では、第3章から第6章まで論じてきた対馬のコヤに関する検討を総合し、コヤの屋根材、立地形態、所有形態のそれぞれのレベルで地域特性に応じた多様性がみられることを確認したが、このコヤはさらに集落景観の形成に寄与するという形で文化的景観の構成要素としての役割を果たしていることを明らかにした。

第8章「文化的景観の領域と構成要素の反復的分散分布」では、第2章で論じた重要文化的景観選定物件における構成要素の種類や分布様態、領域設定の問題から対馬のコヤとそれが形作る集落景観のありようを相対化し、対馬の事例を基に文化的景観における構成要素の反復的分散分布を一つの領域として説明する文化的景観のモデルを提示した。

以上、本論文は重要文化的景観選定物件における構成要素の種類や分布様態、領域設定の問題から対馬のコヤとそれが形作る集落景観の有り様を相対化し、対馬の事例を基に文化的景観における新たな設定、つまり構成要素の反復的分散分布を一つの領域として説明する文化的景観のモデルを提示した点において新規性と社会的意義のある研究であり、我が国の文化財施策や地域における資産の再発見及び再評価をもたらす成果を構築した。以上のことから、博士論文として確かな学力が示された労作と言える。

著者の博士論文研究指導に当たっては、独立した研究者として研究全般を遂行する能力を養成すること尽力しつつ、綿密な研究打ち合わせと指導を行ってきた。数多くの国際学会および国内学会での発表や、査読付き論文への掲載も達成された。それらの研究成果の結集として、本学位申請論文は執筆され、学位審査を厳正に実施した上で本論文が博士（芸術工学）の学位に値するものであることを本審査委員会は認めた。